２０２５年春 EAA 北京研修

張子一
The University of Tokyo

危険な水面

３月１７日夕方、羽田空港。飛行機側まで移動するバスの中で、同行の仲間たちと会話を交わした。内容は鮮明には覚えていないが、K さんが「憂えているときは水辺に行く」と話し、それに対して、多感な時期に海辺に足を運んだ自分も、うなずいた。その時、M さんが「憂うる者は水を観るべからず」と言い、「危険」な行為への警鐘を鳴らした。そこで前に座っていた石井先生にこの話をすると、「確かに危ない」とおっしゃった。こうして、北京への旅の最初の思い出は、水を見るという危うさが話題となった車内での時間である。

３月２１日、東京に戻ったその夜、石井先生は SNS に、北京大学の未名湖、頤和園の昆明湖、清華大学の池の写真を次々と投稿された。振り返ってみると、確かにこの三日間、ずっと水面を眺めていた気がする。もちろん、内陸都市である北京では、水に親しむ機会は多くない。ただ一つ、水を感じることのできる好ましい場所といえば、海淀区だろう。あそこにある北京大学や清華大学はいずれも前近代の離宮であり、離宮として選ばれた最大の理由は、「水」に近い場所だったからである。

「天下に水より柔らかなるは莫し」だったはずなのに、ただ見るだけで「危険」になるのは、なぜだろうか？すぐに思い浮かべたのは、我々の先輩（旧制第一高等学校）、明治三十六年に日光・華厳の滝へ飛び込んだ藤村操さんだった。藤村の遺言には、こうした一言がある。

萬有の眞相は唯だ一言にして悉す、曰く、「不可解」。
我この恨を懷いて煩悶、終に死を決するに至る。

彼は死ぬ前に、水を見ながら、きっと複雑な気持ちだったのだろう。また、三島由紀夫『金閣寺』の中のモチーフのひとつとして、鹿苑寺・鏡湖池に映る金閣の美しい投影がある。「鏡」と名乗るこの池は、主人公にとって、現実と理想が交わる場所であり、同時に、美の破壊を忠実に映した場所でもある。

水は柔らかいが、そこに映し出されたものが堅い場合があり、それに刺された心は、激しい行為へと走ることが多いように見受けられる。場合によっては目の前に水がなくても、二・二六事件の青年将校たちのように、「汨羅の淵に波騒ぎ」を歌って決起した例もある。こうしてみると、青年特有の多感さと水との相性は、決して良いとは言えないのかもしれない。

煩悶の時代

北京では、さまざまな人の悩みに触れる機会があった。北京大学で再会した旧友は、卒業後の進路と時代への不信に悩み、哲学を学ぶ彼は「国家と個人」の関係に苦慮していた。清華大学の学生も「花粉」だけでなく「この時代」に煩悶していると言い、座談会が熱を帯びたのも、互いの悩みを率直に語り合う場であったからだろう。

青年といえば、「活気」や「生命力」など、ポジティブな表現で飾られがちである。しかし、人が青年として生きるあいだに、底知れぬ悩みに苦しむのはむしろ普通のことだろう。ただし、何に悩んでいるのか、その正体が自分でも分からない場合が多い。ただただ悩み、その原因をあとから探るということになる。藤村操の死は、「煩悶青年の時代」の幕を開いたものと考えられるが、歴史学の通説では、あれは日露戦争の「大勝利」によって国家的目標が喪失され、「個」の意志が活発化したことの表れだとされている。また、同時代人である宮武外骨や徳富蘇峰などは、彼の入水を「失恋」の結果だと解釈している。では一体、藤村をあの危険な水面へと導いたものは、何だったのだろうか。

恋の季節が寒さを迎えたり、青年の「野望」たる受験が思うように進まなかったりすると、水に映る自分の姿が醜く見えてしまう。自身の経験からも深くうなずける。ここで思い出されるのが、藤原惺窩の「鏡中の清浄光明なる処に虚霊あるぞ」という言葉である。「虚」の心は、自由な「霊」を発揮するが、それには心を鏡とし「光明」を受けねばならない。だが、青年は鏡に映る醜さやまばゆさに耐えきれず、水中へと引き込まれてしまうこともある。

藤村らは、自らの死に高い意義を見出そうとし、哲学の兒や憂国の士として、共同体への犠牲を語ったのかもしれない。これは死を軽んじるのでなく、その意義を裏づけた敬意の表明である。彼らの「成功」は、明治・大正期の知識人に「精神衰弱」という「病」を感染させ、文学と哲学の前進を促した。

北京大学元培学院の寮の地下には、清華大学の防音室を模したカラオケボックスがある。設置のきっかけは、「ひとりで泣きたい」学生の声だった。我が国（中国大陸）の青年も、北京や東京など世界のあらゆる場所で煩悶し、その「個」の煩悶が価値の基盤となるならば、より良い精神的文化的な国づくりが可能になるだろう（？）。ただし、青年は「青年である」あいだ、水面に向き合うときには慎みを忘れてはならない。

しかし、果たして立派な大人になれば、水面の危険さは消えるのだろうか。清華大学人文学院の建物に入ると、思想家・王国維の胸像が静かに佇んでいた。一九二七年、五十歳を迎えた彼が入水したのは、その前日に我々が訪れた頤和園の昆明湖であった。藤村と同じように、王も短い遺言を残している。

五十の年、ただ一死を欠くのみ。
此の世変を経て、義として再び辱めらるる無し。

仕方がない。大人にとっても、水は決して安全な場所ではなかったようである。